

〔筑後志風俗〕性寛舒質眞實、才慧敏智巧明成器有て、文武諸技に堪へ、工思有て能く物を摸す、華麗を好尚し、滋味に厚し、些の英氣有て義理を好み邪妄を憎む、困勤を厭ひ、安逸を甘んず、凡そ州内の東塞俚俗上筑後と稱すの郷民、淳素勁勇、古風を存す、西郷俚俗下筑後と稱すの民心、痴騷、嬾惰、義氣無し、嘗て先君春林公豐氏、有馬丹州、福知山より米府留米久に轉住の後、府下の言語殆んど京語に近し、是丹州の本語を摸するもの也、唯生葉の山民のみ本土の故言を存して、頗る訛強なり、俚俗これを生葉イハハツヤウ聲と云ふ。

〔西遊雜記六〕七月朔日筑後に入ル、堺に標木建、是より立花左近將監領分とあり、扱筑後は、山少く平地多く、所々に森村見え、焚木不自由ならず、水の流れもきよく、上々國の風土也、然るに在中廣く見渡すに、豪家と覺しき百姓一家も見えず、風俗肥後のごとく、十人に六七人までは男女、ともに夏月は裸身にて、婦人などの人を恥る氣色更になし、風土は肥後よりも勝れてよき國ながら、人物言語の風俗はおなじ、初めにいふごとく、花は三芳野人は武士にて、城下近き村はいつしか見習ひて、中國筋の風俗におとらず、在々に入ては、中國上方筋の在とは大ひに劣れり、農具なども違ひしもの多し、中にも此邊の筵は角にして方六尺餘、五穀類を日に干に、こぼれずして、便理也、然れ共雨にても降る時は、壹人にて取入る事自由ならず、二人が、りにて持はこぶ事なり、何事にても二ツながらよきはなきものなり、又へふりといふ農具あり、

畑方三分、田方七分の國ゆへに、筑後川を堰て口またに小川あり、水損はいかならん、早挽はなき國と見ゆる、此川々に鮎多く、鵜遣ひ村々に有、

〔日本鹿子十四〕同國後筑中名所之部

一夜川 世俗に筑後川と云也

そのまゝ、に後の世も去らず、一夜川渡るや何の夢路なるらん